源註拾遺 [illegible] 四

巻六 夕霧 御法 幻

匂宮 紅梅 竹川

巻七 橋姫 椎本 総角

早蕨 寄生木 四阿

浮舟 蜻蛉 手習

夢浮橋

源註拾遺巻第六

ゆふまくれ
御のり
まほろし
すみふ家
うちたれ
しけ川

薫中将[illegible]

私云
但幻の次ニ雲かくれの巻阿りて名のミを
しるして本文なきゆゑよつて目録ニ載せず

今謂雲隠巻本文六帖今現行于世并雲隠抄三巻亦現行矣

椎本文庫
□曜文庫

夕霧

夕霧

一 そのほとなる御すてなしかゝりてえまうてとふ
ひ給へるなりけり
細 い世物語にあそいきてあんと侍りいそてハねと
なといふんなえしついてなしてハとえ
〇今按 志ひてえまうて給へるといふか甲へ
伊勢物語のあそいきてハ将てなり えきさあて
ゆゑなきえこうまかりて叶ま侍志ひてもまさ
しきかなハめひ志ひなれと中ころより強て
志ゐてと書かきたる誤りの字の儀なる
へし

一あなたのはせてそてそよふ 袖をうしとおりたた
るえまふ
細御息所の 北方殺をきとえ
〇今按 此息所より夕霧への せうそこの 返事
河つてとわきさえせうそこハ人してのへ
まひゝさんあはうひく

一なつそらなる かさられ
細 夕霧の涼しきをいへり
〇今案 此ハつきいふちハこえ 中夕そ人のなみた
夕霧のまよひハ立とまるへきもあるそ中くらへ
なきを夕霧のところ まよせて中たをいふ

細流の説叶たし　　和泉式部
人ハゆき夕霧はまよひは立とまりてなき 中空よ見えよひし
夕霧の涌とハ人ハ表裏してよくね似たり　河逐　日本紀

一やちたせかふ
〇今案 大和物語よ
寺とてやえも河合そハ中たなハにとつきかなれ今ち社を逐

一なるをのはしちちらん
花 今案 山城国愛宕郡 云内小野 郷ハ上賀茂
領也 栗栖郷ハ下社領也 寛仁二年十一月廿五日
陣定河そて官符をなされをたりぬくたし
社の在近かんといふハ此所之 又定家も小野

栗栖野何りそれをいふにあらす
○今按三代実録巻六日写ニ云愛宕郡栗
栖野といへり　和名抄ニ云　山城国愛宕
郡栗野 久留須　小野 乎乃　宇治野　小野 乎乃　小栗 乎久留須
花鳥の説これにおなし　常暁和尚小栗栖
小清睛るを連て右元清を行ひ故ニ小栗
栖の寺暁といひおくりし宇治に何るハ毎と
ひろくるをみをといふともまぎれハなくるをえ
栗栖とかきて　久留須と読しめハ須にの文
字の落たる成るも栖の字なきハ二字に限て
名をつくるよしにかなへ　并栗本六字に

さて枝のうるさき小萩の花ちらんはかりゆきてかむとおらん
とよめるハ古き和歌也　又別之
一ちるふくるけ待る　そひに
河君こふる心ハちるよくく連と云ぞてそせぬおかふそ候る
箋　用此説
○今案これハ後拾遺恋四ニ和泉式部の歌之
佗よハ気けもこれにハよろしからん　並家万葉集ニ
一しひも恋しと云ふに今きハころそちるにかくつなき
又万葉好忠歌ニ
君こふる心ハちるふくるこれと何も救ひなぬ家ヌなきさん
一月くまなく出てこ行らて夢すもまぎれ出てさし

いさよう
箋 雲ハふれとも 緑月さやかなるあたへ 西行し
○今案 上の雲のていの物のかくれて見られ
ハといひ今まて夕暮の雲にまかひきえていひて
それ月何ゝ紀さるいさなひ吹ゆるもしいひて
あるゆゑちこゑあり にほり月全まなると云
これハよひの雲ハ晴されて 雲ももまきれす
といふ此文月ハさやかにて 雲ハうすく紀はかされ
らぬるもみえ 万葉ニ 第六
うはたまの夜霧ハ立ちて おほゝしくてれる月夜のみれハかなしき
一 あき霧のおもかけ 西よ

○今案 古今ニ
何をして身のいたつらに老ぬらん年のおもはんこともやさしき
流 いそれ松もちてせん千鳥の松のみえんともなし
一 をとろなく昔しゆめ
○今案 夕暮のまめ人なりと 花咲なるをそせ
て池らさせ 年まさるをいたり
一 ぬききぬハえほさせ 紹たし
○今案 拾遺ニ 蓬家
あめのしたのかる人のなかれハやきてしぬれきぬひるよしもなき
一 人くあやしまし小きこえありさなん
細 何となくみやそなく人の中侍れりしとて

○今業平しやうに 女房達 おしなべて御寵愛被
よしやとて 細流の中傳へりしハ只今まで
おもひ給ふやうや
一あやしう何事もなきさまにて
箋 前栽の中をけしき者の姿して夕霧に
えんえしきに
○今業 此頃前栽の中にあらはれ用ひさせても
おもてむきにて近付迷ひしるを嫌ひける
一あふりしかほをいひて
○今業 人をいふにハ人を疲まれ出来て尓何
に致されハ人のうきめをつくしきにハむつかしく

一まそいふ名ひなく人のさふらうて
○ 今業人のとハ人の言分とハ夕霧之よりてと
ハ此ての字乃にふたつの字前栽たりやましてハ
いふひあしく夕霧の禄をたになりたりハ
のある名をいふさまし 実は面名れハ志
しハらくいふ人ありとも つひにハ乗りし何
たえしとおほしなくさめもえ又まいそと
いひけるにかるたえりせハと名だ入て見ても
お前し古来の古説とも まけたまへ 叶ふべし
一又めくりまゐるとも
○今業桜移送よ

然伺ひてこの世に父ハうまるとてもおもひ出して見えけり こゝろ世の人

一 あかつきになりいはれけるも

細 あまりたえておもひしも今ハ物きこえ

○今案おほえいらて時の御心たえてとめぬへき世の

中なとい ふつ紀なき人なもあひまゐらすの事

に成てそ思ひしらしめきし人の御心なりし也

云なむ侍るあらん

一 たのみしものゝおほしたふにいとあはれにて

○今案 落葉の御たえらうとのゝおほしめ

さふらういとゝいとゝおほしきよふくるも見えつる語

ためとなり

一 今しもまさる御心そひて

細 夕霧猶人のうらみもあらハ御息所の心のうちに

いさゝかゆるし給ひて す ゝめ給ふる

箋 此時夕霧のおもひしハ御息所のさもんと御息所の仰

給へることを

○今案これハ落葉の御心のよりて夕霧な

ど給ふ猶ゆるさるまじき事とてえおもはぬなる

文ハおこる給ふを落葉のおほえさると御息所

の相違したまへるなり 御息所ハ心のよ

ろしてゆるさんとて給ふを何とも思ふ心しも

一 此文も名もなき事もなるをもあきらも何心

○今按けさやかとハ女三の宮をあてさせて宮〻さま
へうしきなまめを云なり
一めさましけふんちよかやは
○今案夕霧の君を見て御息所の心の中に
女三の宮を今も語えさするを悦ひのよし
一あまひもつまなきをいふとあるて
○今案さきの夜ハ忍ひ語たれともことはりを知
て語りてかくおもひを打こさせて夕霧のうつりか
まして語そぬるハあやしきをこよひなきもえ
め語えさうしよ　推してそれを思ふと
おもひ語へるをつまなきをいふとお見せてとある

一かくおぼれのあふりしまめられんやうよ
○今案万葉第十六にあ
そうのえの小集楽に出てうつりまさうつますを後とうとも
古伝云昔者鄙人姓名未詳也于時郷里男女
衆集野遊是會衆之中有鄙人夫婦其婦容
姿端正秀於衆諸乃彼鄙人之意弥増愛
妻之情作斯歌讃嘆美貌也そしけるなとや
一をこつりとうんの心まて
河誂(テコツリ コシラフ)　攄(テコツル)　細料答して云んとえ
○今案誂ハ日本紀よをこつるとも　わうつとも
よめりそうしかきむく也　攄ハ錦のい謌す

おほくのごとよめりなとこゝろといへり河な
よめれハ考へし細流の説ハけひてもよし
六帖第五 衣ひ 教ふといふ題に
河くへのたとつうきそのあやうきうきもゆるのかなしさ
一おほろけにおもひ河まりて恋んうき隠つゝらん
或説大かたに思ひ河まりてのすかハあやしく
○今案 此説けれ共 おほろけ あらハおほろけ
のするにいとくまるゝ
一河くかくして
河あさに見かくしてのせえ
○今案河へてといふ云さきくもみきされ

ふくゑかくしてのんえ
一あしと紀御てるらしおなて
○今案 和名云 説文云 鞍音安字式作鞌 和名久良 俗有唐鞍移鞍
諸鞍等名 馬鞍也
毛ちなるたちこま紀の考へハ駒のおうまれる 左大将胡元所云
一狂といきけて
○今案 𪗾(イハ) 𪗾(ケテ) 日本紀 喘息 曰上
いきけといきけあきとはしあくといふハて
胡気あり恕をあけあく大事なるたおほ
けあくといふてし
六帖第三に
遠きのうくもいさる河くのめふいきけあきまてくるしき

一おもひそめしたりこちて
年のうち紀はさたへ御逃ハいふおもひそらめるん
○今案 此歌何ふ出るにいまきしれ
古今
世の中ハいふくりとおもふらんこころの人よらうしこらそれそ　元方
此歌を見てよめる歌も
友則にひき人のうらみハおそふとふなる見らるらん　古今よ
此下句を見まてまや
一令さん心よられたもと
河合さん色よるなふおもふハ志るハやそてあるへかりける
○今案 これハ 古今よ

令ふ心よりふおもふハ何かわれの歌かまし
恋きまよ 合せりけるおもふたえ志るハやそてたえなる
此その上下句を見まし へて川辺こる上
の歌のんをりくそ 詞をとれるおもふ
一花やてふ やとかけハこそ河しめ
○今案 枕草子よ
これ人の花やてふやといそくも家のハ河めそ志ける
一いそしく を おもひる
○今案 ともおもひまえ を おもふけれいえ
古今よ
むかしの立にすら名今更ふをおもひふるさと河辺や

一いはまとるやまそて消えかる露も草葉のうへと見ゆ覧

〇今案　古今集

露をなとあたなる物と思ひけん我身も草におかぬはかりを

一墨染ゝ小野の篠原なそ起て

細竹の篠の原ては名所なり　何かしのゝ原たる

〇今案なそてきそとし以るあるは良すゝのす

とんれそかくのさまんるた　浅茅生の小野の篠

原とよめる哥の家ハ名所なあるねとられハ

小野のなりてよまれしまゝた名所なるへしかに

ゆふへても小野の篠原なそてきそといひんす

何家すゝかなんき

一をくらの山も色とるましら

何　殊の夜の月は光清けれハをくらの山も出たるなるへし

細川家に及たるへき所も見まし紀之川家

不用をくらの山もくらからしとなり本家のく

らぬ山をゝをくらの山といひ出るや読ハ雨霧に

〇今按　新古今　秋上　歌ふ知　大江千里

いつくにかこよひの月のくもるへきをくらの山も名をやかふらん

此歌こよひの月とさへあきらかハ籠ひなく見た

えてくらきなるへし

後撰集　雑二　業平

大井川うかへる舟のかゝりひにをくらの山も名のみなりけり

續後拾遺　雑下　　是則

梅の夜はちらかくるゝ花やなきをこれかたくのみといふらん

一 そひきしもなけありして

○今案　第五句　かする

わかせてをおちゆかめとさき竹のそなひなねし今案も

一 おしつるてなかころもいらてよらんなとくち

そさひ語んなと

○今案上はうへよりおつるとやらいひ語ひつらん

とてかくかゝるは志らかなる語ひつゝはこそ歌を

おしつるて語のなかころにも様彼岸のいふよか

らんといふ句をいきし語ふなしめとなり

此本ゟ丈本移もとしろめと何も出き

ぬものを志る

一 おふしたてえんおむと

豊かりふおふしそえたちのおやさんつき志もある本

○今案ひけ方何にもあるにら志る

夏家第集り

毎ちののおやさしはれくなり思ひるまふ世るとめる

玉葉集　恋五　　朱雀院御入内の後

いかなるすゝきえん清膝云のもえんつかえし

なり　　　女御藤原慶子

芽のう紀ふ云ひ何由しをてもしはまやさえそろき御まをえる

一このてやつかハふるまきさらひてはかり
まけりぬ
○今案毎からハ堪る力の堪るほと絶えし
たゆまとかけるハ仮名たに遣ひて誤るとなる
さらてたて　仮名をしらぬ人のかくなれるなし
一おそましかへき　わさなと
○今案古語拾遺云　天佃女命　古語天乃於須女其神強悍猛固
故以為名今俗強
女謂之於須志此縁也
おそましハ此須の意之
おほ次ましかるへきなとあるなハこれを
さねかたにて　段なるや
一をかしとまり　強ふへてもあてしめさき

あそいらし
○今案情惜紀云　女房といふ人あるかきり
ハあつまるを見さうとらつひて　秋のたのしめの
ころをひむかしくあかりぬ　出るそかる
めをこれたおきなきる　手をひきよせてはつふ
いふやう　抑おほえさるし　わかのことあれ
なりやおほえ侭さてふもいそれ事とところにし
まうせ事たりふこれいそてころ日よなりぬこて
とれハ記さる　らてたまへとし人をいそらやそ
らりそてそひつてよろしハ何ぞふなりつてさら
そもとそふそそひて　なのめしかりきにてみ

ハいとやさしくてあはれ深くきこえてなん侍る
よの人沙汰しあるもうちまかせていひしらぬかなし
一あるじとて身をまもる
○今案らハ不相応なるハ何ときこえて侍るともえる
一いとまうし志らぬせらる
細まうこハ文え夕霧の流れて露ときえゆく
のまなハ世すたらひあしとえ
○今案 下ふかねり初まて志らぬハよくあれ
人の身のけふこそにと又まハあはれいましな
うるまの明らかん
一眠まさひし○あひたる紀元の夜ふまく清まさる 実の思ひと

○今案 建春門院北面哥合
関路落葉 左 権大納言隆季卿
あふ坂の関のいはかとたきあけてこゑたえてける風のつらひ
日 右勝 清輔朝臣
旅の空紅葉ふこきおち葉清見かた山の高根風ふきて
れ家ふる浦ハ人ぞりくる見ゆるを家人の家
ふきていふそやゝ侍しを関のいへりとそ
良暹法師のもるなと思ひうちなるまへ志られ
そも彼関のいへりとふきあらし山うち出るきう
京の初といふ家を 思の扉とみるそ 嵐門
といふなハつ(?)のうちなれ太坂の関ま思門

とよみたるを思ふそら何かしと云ふ語へてて
のゐなふおきてハさゆうかや侍しおりに候て
袋草紙云 又良暹於試所詠云 一日江州ヨリ
上洛し間於会坂時雨ニ逢テ石門ニ立入テカシコリヲ
レス云々 是優繁義也 而懐円ニ問云 関石門ニ
ハ何様被立入歟 门侍也云々 懐円咲テ其ハ
石ノ扉ニテ侍 不知語也 不便云々 云々 良暹
閉口 懐円度々 蒙難者也 但為仲ニ
アリニ ナノコトツテヤセシホト、キス
セキノイハカトイニソスクナル
如此者石門歟 又彼
失歟 思按 続拾遺集 恋歌 以之よ
路ハよも良とや見しとやつるりける人の後はそよ

紫式部

かへてハ名ひきつぬや名をよう帰てよする岸の何しもなし
これと云を何の家ハ石屋之その夕暮の家と
為仲の家とハ岩門之云る家の家をそて石門
とよまんハ惑ふる之 彼りもそハ二ツとも不何って
別の詞之以るを退りも難きてへしと
一まろハよ御り 志不紀
○今案 大和物語よ
打ハ石てあめも早も打も不見めんのうしも 何を云消打物也
菅笠 恐ふ 恋之 無名
恋とハ今ハ名をわらひの何かひぬさきふあらぬれハ

一恋こそおもまうけかもおハしまれさ后ハにくけれ
なんれんえころとみたろましとなふころなり
○今案作撰恋五子一條ゟまてみいとなん恋
しきといひよやうこう几道えおもふのうらき
てやうとそ　一條
恋しくハかけをしふくておくはめよ恋うちとけて思ふ　うかなり
也
一かけ道ハいとく人をまとはしてちくらぬけのうとく成なり　俊頼
かくれをさらけり
細　夕暮の詞也　西　おお夕暮の詞ハあらす
人をとしこみ景をこといふより詞とえて

○今案両説　其兼之
一かくしきけを
細　欲くしきこと　弄　濁て読之
○今案欲くし紀なり是上を清下を濁てよむへし
俗にいふもしろなり　秋より濁へき
況なり
一おいらくの　志さ　まぬ
細　直ニ之　栄日　直まいとニ之
○今案おとなりといふんくて俗に為
常に志ねなといふもかやうんしおいらくの詞行
云物徒字作　推送なとふもみなもおとなりとし

なかふりにひて此句

一 なかし身をうしなふよりハ

○今案 万葉ふるをといへる 揮の字をかゝり
揺つゝてふりたるんなりにける字ある人をさしかゝ
りをさかて ある歌の中 歌をさしてるなん
これやとまむしといふもよく叶へり

一 なにはつにてめつらかなり

○今案 古今に
何ぬやとんかへしてたる何ひ事ハかへされしかきまれ 続き

一 角かるかれをふるきおもへる なきそん 語
てそそつる身とおもひしなせ

一 ○今案 巧なるかきことあらん
いしそ来よりけるよ

○今按 河海に万葉ふ乎十二に盤城とかきて
いはきとよめり 若此義花不動の心やと何
るハんねらし 彼所ハ
盤城山角も古さま破滑のこぬの須に家立まさん
これハ名所之 日第十二に
ちぬハをたつき山の石城もこれハとともにおとふなてらや
此石城ハ墓のことし 日本紀に石槨これふおなし
いはほも古ふ叶たり 万葉乎四に石木にも
あらまし 相きてよみて 乎廿に いしそ来よりあらて

しかくもよく伊勢物語にいひ来にしあかね
はさまざまにありけれどもるゝをいひそへてけりと
いはれけり謌に
一 いひそへてゆけるとは名をおもひとて
河いひそへはるゝ名のあつき事のあるきちかく橋のはしとかくは
細川殿よ乃りへうしさること
○今案河海の川殿何に河る殿より知りまて
万葉にも
里人のいひつるもふとゞ恋しき恋てもしらん浮名なりけや
人めおほみこたよあえませけりてものも恋しれは浮名かたんも
古今よ　　源忠父

恋しなはゝうき名はてし世の中の人のいかなるものといひなすとも
これらの心をこのふそへ云々

御法

御法

一身まかりける時ハ歌に法をしへたるに
○今按　拾遺集に　中納言朝忠
万代のためしとりに君を引おきて今いく末ハ神そしるらん
けるを　よめる也
一このちとりの哥も　筆のあとにおそろしぬことをして
○今案　百千鳥ハ　万葉集第十六に
我門の榎の実もりはむ百千鳥ちとりハくれと君ハきまさぬ
これハ百千の鳥をよめる歌にてちとりといひ
てこれをたとへていふ時千鳥ハくれとゝいへ
又日集　続古今を　百鳥とも千鳥ともよめるを

これハこれを引合て心とはよめる也　和歌式
抄ハ千鳥のひとつはねるを見て百千鳥とハ
これかいふんとも讀これハいかへも援も
続古今にこれらこれるを　古今の百千鳥されつる事
ハいふ事につきて事とんなるせんなもおそ
紫式部も事としんなれるやことにかくるも筆
の曲よ書事　哢これハこれを思ひてくると
ちえ万葉上に　朝開けのたかあぬそうよ
このちとりの数もいとうらやましかる
も又事をも見るよ似たり
一これ人のぬきかけしる哉のいろし

〇今按 陵王の舞に感して見物の人々のさき
ぬ程て縁のすゝまるゝやさゝるゝはなきこと
ハ有めし
一今夜ハまたたちたれる人皆わしてむとくなりや
〇今案

一かくしておはしましては
細殿中宮の清涼殿にいてこれハ紫上の御道
〇今案上にあんらのこゝにおはしましてへ
々道ハこなたにはきこえ程にてあるハ六条
院の東対なるへし かくて絶えるまうて

それいのゝほそとのゝ御方にまうのほりて知へし
又下にあるにも元服して程たる〇ハ中宮わたさ
つ給ぬるに何をもわするに六條院に中宮ハ御里にて
やは紫上の御対面何かしこきにも二ところ中宮にわたりたまへる
なに二条院へ又中宮の御局何ゆへこれよ
よりたえ花宴の御後何ゝまうて給御ハ六条院の
と六条院まて紫上の御病中あなたの対面
まはりこせ給ハんにても中宮の御対面てなし
けたしまつこなたへ御局給ハんにも女
御方ておはしまし時なとよりハ中宮まて御使も
まうりしり道たえてたえて条らん事たかひなき

なつかしみて侍りしとハのこまかに又此集上
の御侍なりしハ侍れハとのこまかハ志るしハこなたに
ふかきなる事とりかへさんと侍れたとへ志らぬ
しハこなたなるおもむきなれハとりかくも中宮の御
詞なり

一 かたこそおほえて思ひ出ゆき
○今案 句の義をハ紫上のそらそ氣かせ給ひ
くるれつらつかたへの為とも中宮をハ只宮とおほ
え給ひて此紫上をまちのかておやなりと
おもひよれるなり

一 さるハ身にしむハかりおほしぬへき物風なり 秋ハ

○今案 六帖に
吹くれは身にもしみける秋風を色なき物と思ひけるかな

一 今ハ身のくり 龍道
○今案 法花経等の従冥入於冥の心之和泉
式部か哥に冥よりくらき道にそ入ぬへき 此哥拾遺集にハ入
これと同時の人なれハ引哥にはあらぬ只哥
例なるへし

一 ことなかの上にともなし せ給ハさらんをのみ
○今案 上ハ源氏の今ハのくらきころちのそふ
らひきさにしみをやへきなとのこまかなふこた
へてかくいかなり

一 しにいる思ひの中にても此ゆかりかと海りあんとおもふか
ゆゑもりつなきことなりや
○今案 とまりあんハ称ふ詞ニ或説ニ死人
魂ハ紫の死骸よとまりんとなと云ハ叶たる
説をよ海ぬ人の只説学とそれるハ解のなるす
お[illegible]

一 露けさハ昔今ともおもほえす大かた秋の世こそつらけれ
孟 源の此返歌ハ無[illegible]ハ昔も今もこひしけれとも只秋の
世つきてなり
○今案 大かたゝ秋の世そとハ紫を[illegible]よそへて
大かたの世のつきさる なきたる心

一 のほりぬる雲居なからもかへり見よ我あきはてぬつねならぬ世に
○今案 上句ハ紫上の 魂のゆくゑ よ死人の死ぬる
を[illegible]何るとりふも 非業の来ふ 悔る心万端
ふ天ふ志りるとなる日志りるてなと云るもこれハ
秋好中宮のかくて御を紫上ハうくとおもほして
始ふ心をそめりりんとよそ給へるふ日にし
て秋をおそりてよみ給へんも 秋好の御方へし
らひよこへりれハ承絶たそてぬといふ雨よ始
たれもたちそてよめるふかき用さといふ心

初 幻

一ちるやとハ花まてたのしまも人も形も何かは春の名きこゆらん

〇今案 後撰ニ

あかて菓名そめぬへし句ふりん花まてたや浪も立なる

一身をさめてきるかひなくたる花のこすりと思ひやなす 歴き

〇今按 後撰ニ

年を経て花のたよりにきてたていとゝ何ゝなく名をや立らん 立なん

六帖ニ

そきてもあるふハ何れともは春ハ花のたよりそ嬉しかりける

日 こゝろ〇

あちきなく花のたよりにとたえられハ家さへ何ゝを成ぬつゝ

重之集

あきなくて春のことふたたひける花のたよりにかゝるなみ

一これよりもはるこそゆれつきゝ人なくも

〇今按 古今集

山高み人もすさめぬ桜花いたくなわひそわれみはやさん

一袖の志つくみやまゝあんぬまて

細あらそ河心のうちにちかふれん袖の志つくみかはるよしもまん

〇今案ひ家何よ出るにか志つくみハ水をせきあ

あるなたるのつきゝさわかきかや

拾遺 恵心ニ 貫之

涙川おつる水上たかけれハせきそかねつる袖の志からみ

まうしく此歌にてうつりとみん也

一かのみきはのこゝろたえにし

河 すゑはこゝろえし　梅の木ある所に心をつけてなかめて

○今按此川辺にたつ万葉集三に大納言旅人の

の歌之下句　ひむかせつなかるしなからとはり

一まつひとすゝきそよぎ歌に持たりけんと

花娘能忍さめあらして　世の中をもえそむつると

○今案すゝきたつるとハ　山里をあそのるゝ

一からあし　萬代のの見えしよりうつし花の散るをに見よて

一きもこそハよるへのみなからゆかりのゆきてふ名さえ見えて

細よる人の水のみ　河海に委志るさるけ此歌ハよる人ハ便

のんえまつりの日ありぬようて　神社にてよせて

なりの中納君ハ此紫のよる人みてさゆふび侍る

なり草ま　かるもとハ今紫上ましまさばしいて

たよりたらしあひしらん　されバ葵のゆきてな

とも忘まじらう　源もあふひといふをと忘まえ

て給ひぬるよしん　宗祇云中納言さえ見えて

とゆるたを見るす　心ねさゝハにくてもたよる侍る

へしよる人ハ為ようん　ことま　あすハあもしる人有り

紫上にても給ひて　後ハゆかりのゆきての人なとも

こひぢまであぬれに名をえてこそしらるる
歌の心なるへし　定家卿の僻案抄にもよるへの
水のみ見えたり
○今案よるべをよる人とさだめる歌　僻案抄になる
へあて身なれとこそ定て海てつまとりをひかる
それまでもなく此物語上にも有又万葉第九にハ
塚の上木の枝なびけり聞しがごとちぬをとこにしよるべくも
これなりけりといふをよみえたりしめしとさ
へよるべきにあれとよる人といふ詞のみをいひてよ
るべの水といへるよしを歌せられまでぬはるべたり
ても字えたり　奥義抄袖中抄等の中よ　歌有

新古詞を歌せんよハ先もるを明らかにして理を
きまよりいふべしよる人の水といふ事ハいふ歌
ともいふなんるものもいふそんをのこさりかか
るといふハ用なきるなん　丈本抄世らいあふの
示足らるる人のみよろ流れてしれる歌の外なるす

和泉式部

神かけて君があたりにふれこれりきハなる人よなる水とぞ見る

又袖中抄第七　古歌云

神さびてよる人になきまゐる何ぞ水のこくはあるまでいまもとゆぬに

奥義抄にも何そこにハ神さびのなる所にた
まるとあり　又

成緑母の歌に

毎えぬる影に見えはてまじきにかゝみのなはこゝろなる
かゝみのなにはらはかひをはらしかゝるをもいふ
をとかゝるのことも又え題の心あはれに
んよるへの水といふにかしき歌とふへきにこそ
いひうるをなひるなれり　又万葉集第十七にみ
おもうしとよめるも水に月を詠也　又嘉慶二年十
月住吉社歌合　社頭月といふ題を

清浦胡居

月影はさえにけりな神無月やよるへの水に薄氷
判者俊成云よるへの水といふは源氏の夕霧に
もかものなかのゝ歌によさもこそはよるへの水に

ろくたのみとよめるを見給ひしさてはふるき
歌とも見及ひ侍りしか此水をおなしくうけ給
なりふ毎とへはいつ迄のやうくわしも侍りしめすの
当社のかまへの月かは海のおきて氷をまかき
須のまさこ玉を志んをはおきそてよるへの水
おもひて月はさえにけりしなとおもえんす
やいうとところ　俊恵清浦胡居云よるへの水は
つゝの社にも侍らにころ又歌よめる源氏
のことふあし和泉式部集なとハ此題せさら
なるふやうく　此同者俊成も侍らふえて月に
よむへき京極おほきをおきてよるへの水を

そひよしれとかをこそ雑せらるゝこれよりて
の水ハいの道の袖まもえまき 義ハ旧説 能まえ
よまれ ゑハ何をいふとんかそ後家のんをハ
定むへきく 和泉式部の家乃ん 掛水とてち
ふ時ハゑをのむや 汲まえそその人をよめり
とこえとり さるよ 神ゑを節て 掛ふ名とは
見え

日本紀云 敏達天皇十年春閏二月蝦
夷数千寇於邊境 由是召其魁帥綾糟等詔
曰云〻 於是綾糟等懼然恐懼乃下泊瀬中流面
三諸岳 漱水而盟曰云〻 臣等若違盟者天地諸神
及天皇霊絶滅臣種矣　伊勢物語

山城の井手の玉水手にむすひ たのみしかひもなき世なりけり
中務家集二
神乃ふ顔をかくし 山吹ハ名のみをあらはれやすく
これもまた人のゑ乃上手 山吹の咲けるを見てうちお
ひきそて顔の色を 蛙の声をあはれなりとて
山吹にちりしける久しき神の 花色なくおもふ
きそて堤の山ぶきやとよめりとこれ 日本紀よ
瓮の字を 敬とよめるハ瓶の形にして盟の名
あるを誓ふにいへども 誼瓮といへるや神前ふ
瓮をすゑ置にいつきの紙を節へを斟て
掛すゑゐハ用ひん 九まえたし 中務の家の歌なり

あかひたりくさゝめし小ゑてけり ふるきを見えしまへ
ていふとりやけ名そてよまれふれ道とのゝまゝ
へいとひて哥ありてとハちりひてきこゆけれふ
いとあやしくて
たゞくハ老ひきそうし世の家れたも あふひハ弾やつらたりまんさ
あとひとりハうりハおほしをかへぬれりしきこえと
いふまていひたつけて見れハ中納言の上方に京
しふらけぬ家にあいさそハ昔の哥ハこそ
アそてよる人のかふらく浅のみるてくにもあゝめ
かふのんすしの名をさへよまれてれとのこまふ
るよそしかめく 手人をいつとちりて何かひ和て

やつらたうまへきさとハよりて強くり つらたうまへ
きさとハ於造よ 東三条入道の太政大臣のつらをて
これつらたりしあるおあつハとといふを見まる
なるへし古語にも始終の人をよく?しまさら
然し
一 いとゞ坊ぬふおそれはせ波ろりき浩多之
細?にして此ハ桃りき郭公いとゞ坊に書れたせたや
〇今案 此哥何ふ出るか志りん
一 郭公きみよつゝあんたゝの花橘もて今もはらうそ
〇今案 古今よ
古?人の中ふかよりて 郭公は其様多てゝ常とつけなん

一 流まし〳〵とわりなきにも似て夜のうちをかとゞまり花虫の名なる
細蜩を虫といへる面白し　是ハ歌の上極なきなし
ぬるよ蜩さへなく鳴にもよしとくとゞまりしとハ
こゝろなくなきていふ心
孟　かとハいふこゝろなし
○今案 古今 躬恒 歌志にも続くにて
蓬虫 松虫 蜩 此迄八そをつけて 載たるも是
ことしき虫につゞる かとゞまり 花ハ見る名
そのうちに河にて　続後撰集 第一 東宮の
源氏の中の水に影をそてよ月ハ　紫式部
影見えてうき歌後おちそひてかとゞまり花澱の名にも名
又千載集 冬よ　堀河院の御時 百首の歌なり

るはのしぐれの歌　　中納言国信
こゝのしぐれて ゆく枝てふかとゞまり花虫たりける
百そよハこゝちかきまきて あるかれハかくてしり
こちらハおあしくてたつけ〳〵まいきこえけと
つハ 託の字之事なよせそする心
一 あれそゝのあやせばやのよそれぬ花そされの名に歌そおきそふ
○今按 七夕 詩よ歌 鹿別涙 珠空落まさ
露及明朝 涙不禁 これもの心なるなし
一 今まゝし へかくる月夜よしおくれそゝも
細人も身もあなれし あるを今まてふかくそしめる 学社吟之
○今案此可歌ハ　古今 恋下よ

人の身もなかりけるをあへ出していさんことひ申ぬると
日丟五
是をうしとおもはす清ぬ抱なき是ハかくても画ぬる世ょ社陰道
此二首の上下の句をおひかへりて一首ふなし候
句ハこて不今まてと哥ふより古今も能ゟ
まさおもひて不然ハ次の哥をゑらまれて上句を
依宗ふなるへし　引歌なくても有へし

一まことや等師のさしつき乃法以てふ
素性の哥も志らぬ雪のうちふ色つく梅をなふ見えん
今撰集
拾遺　素性　跡ふ屏風の絵よ御名の所
たふ梅の花かきたふ等師と所りしとかきたりけ
そしてとられ候しをよむ不よしのふ

雪ふ花山路ふなかせて消きえ来まさ川むかふの絵よとまりて
貫之家集云　御名の所ふ等師の久る法
いそふなかりしをとことも庭ふおりて梅を
ちてあそふあひぬふ雪の宿かすまて梅をれ
る屏風　絵有
梅の花それとしまかへハ是川の山路の雪花おもひける

紅梅

雲かくれ

内こや

はなてらのつまふきあへぬ荻の露にもをさ〳〵はかなく

し給たる斎

楊田なるかりそめのやどりにはふきてさゝる楊梅ありあはぬ

名ことにハよわくとも儀式にかふ草ふ河尺

○今案けむふハ名よつきそてふさ見よハあり尺

一菊もほまてるてきつくに

河 ことなる人の老を忘るといふ菊ハ百年をふる花にそ有ける

前頭更有蕭條物老菊衰蘭三両叢 楽天

○今案 忘れくさハ葉之集に有り

これ人の老をそむといふ菊ハとゞむる花にさるといはれハ遠くて楽天詩を用て見る也と老菊を老を忘るといふハ叶たぬにや 元輔家集に菊の菊おとろへたる黄なる菊のうつろふころにて詞とこれよ

これハ楽天の句を用ける事 明らかなり

一あなかちにもまうらいあり尺

河 交糸 日本紀

○今案 日本紀に交糸をまつらいと読ても

一おもひよりける人ハいさなされて

○そ葉 古今に

いたつらにゆきてハきぬるものゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ

紅梅

一なさめのとちもありなんと
○今案ありなん八何かなんなるとし何かなん
八来たりける孫ひなきた上にわかせ所と
えうて定をそ遠ひて叶はぬ吟味あるし
一けたりきくのおゝかなりて見きめくりぬ八お月に
けの命ありさなかしうしとこそおぼえ侍る
○今案我さへ源氏のおんせ年八さきそって時おく
れてお月けをましまして年近う成まさん人
のおくれとまうてなりくてるハみとの命ありさ
とハおもえれ命なう祝ことの八恥お月といえん

一やふけ御あとふいまと後まるをう紀事うそ
おとりんまうんのんなす
一きこえんなりのんかしとて
○今案たりれハ後渡そそ左のてまお前きこへ
一はりしき云しアとのみのうるを
○今案阿羅の光を旅するを佛と見ゆる
続の羅漢と成我えりはりしき云しアさへ
佛の後ふ八阿羅を佛と見てられ家もこの句
言奉源氏のうちとて見て源氏をきこふんのや
このかうけ不知せんとく
一こうとその後かりましかハ

一　紅の色にとりまぜて
河後撰
紅の色にまぎれて梅花見てをちこちに匂ハさりける
○今案此注へる歌ハ紅のいろなとハ見てとて
新撰の歌之　後撰之　六帖にハ貫之歌之　新撰集
にハなくて貫之集に有り　此歌ハ後撰と同し
又後拾遺に
梅の花見にハ色もくにも雨見えきとこゝろもこゝろ見えハさき
隆
一　あさくらせんに
河　化人　果紀
誠人　直号

○今案果紀の化人とみゆるあり　直子よ文
誠人あり　菱家業家に從の字化の字なとあ
り
一　月とさ風よく人見て神楽ハ花も色をりぬ名なむやちかさん
花月とみの河るとふ在と梅の花いと匂ひの花みぬる
萬補集
○今案河のふ歌　家集にハそこの見乃藤
白ハ花あるか有る所と河り

芥川

一 わかき男のよばひせぬあひだへえならひさま
よふかふ

一 よそにてはめきてありとやさくらむんにうつろふる梅の初花
○今案古今に
かゝるとてふかく山の桜木のはなまて色は花にたきはありなん　素性法師
後撰に
いせの海のつりのうけあるさゐなまでとふかきこゝろは底にしづめり　祐恒

これのひとをよふハかくこそてよめる歌なるべしかのこ
のかさいふ説ハ俊頼のなるを俊成とけるハ誤之
一 九よ日の出梅乃花さかりなるに
○今案古今の月やあらぬのことはをおもひいでさるまや
一 はるの思ひよんのさかくれなゐなゝなく花となる
○今案夏家万機に
花のいろにてハくむ桜花といふ筆あくそくもちるやな
一 桜花にほひあまりにちらすとおもふえゝの袖ハゝやハ
○今案上句ハ古今に春てふことをあまたにや
らしとやとこゑるをおもへるに似たり
一 春てふつきなぬ世の一言もいろある人にかゝることのそハ

○今案此詞上に頃と何をまうしゝ中にありて
といひ下にゆゝしきことにてあへんのうちにおもひ
しらましきいふうてんねるにあきき人にこそ何
は道といふ元はりくまゝ道とよゑるされは又舵人のゐるの事よ
いひよ思ふはんなるまうせすはきりてや屋まん君か一言
これ志ぬる年の人のまてあしはあはれといふ一言を
も君かいふ人さき我んふまさもぬるにてあるへんた
らはられしふ君かいふ我きろてや屋まんとく
松遠意なる　　よき人志らは
いきつあんものんつまちあひせのかゝつひとのいええさかし
舵人の家は是よりあつる紙

孟一ときろてんつまもまるもぬ志つもやせんとあり
是案此段家ふふ付紙
一水のほとりの石に苔をむしろにて
○今案　石上題詩掃緑苔　楽天　見丹家集よ
川上のちと紀のいそやけをぬみ苔を延とあしにつそく
一あはれるのこのめもあはきつ竹川よよはらきぬとえひきつよき
○今案こそのめはこのことし何本紙えつたのめは
今案之人のうちよりこのむしろ人の家の元な
めこれえたのこは家んつあられては志りともとた
のむくむあはきは此のころわなるにつけてい
あつ記あり

一御前の庭まてあしなり　給へん〻君しさいめんし
給てかくいと草ふかく成ゆくむくらのかとを御らん
たく

〇今桜新古今雑下ニ大江挙周はしめて殿上
ゆるされて草深き庭ニおりて拝しけるを見
て　　　　　　　　　　　　　赤染衛門
草わけて立居る袖のうれしさにたえす涙の露そこほるゝ
赤染衛門家集にも見えたり

源註拾遺巻第七

宇治十帖

橋姫
椎かもと
あけ巻
さわらひ
やとり木
東屋
うき舟
かけろふ

はしひめ

一 いそやかなる事しこゝろくなと
細さてもといふ詞也
〇今按 いそハ詞のかゝるといふ詞也 日本紀第十
三允恭紀ニ歴兒をいそとよめり 万葉集第七
水底の字をよめり 欲得をよめる 但これハ
いそそれを読へきといふところなれハすこ
しかなへき事 此哉をいそやとよむ事考
ふへし

一 多川きなきんちまるよ
〇今案 万葉集第七 鶴寺とら紀第十

てならひ
夢浮橋

二字多點とかくことハ清を濁きを清む
例之
一たえてきえてみゆらん
○今按第廿九ニ相農とかける相合とかくも
名のひとつをそへ侍るより紀貫之郷代紀
に音のうちをひさすとよめる古今紀には日足
とかゝり古今紀にかゝれるをそへてかへてむといふ
古例之
一盞つき
○今按すくかきあるなとて　桜井刑部丞宗
丹といひし人の講せしを申しるかにはきこえし
盃篇実

濁れる聲をさして篇韻とかきたるにかゝれり
まさしくハ偏旁とこそきこえ昔の人ハ木偏とさぬ
めてハ木偏のやうなを音旁をおそく出きるを
指とはきやうのうちなるへし
一旅として包すむとハなん事とも世をうちに出す物をとそうれ
一志けきのうちをつけ給ふに
○今按六帖に
とありしハ常盤となり郡人の志るきの中にわれへて
一雲かくれ古月のにほふにいとあかくさし出られた

○今按古今序に喜撰か哥のさまを評して秋の月をみるに暁の雲にあへるかことしといへるを宇治の峯なる其便有てかくいへるなり

一 山のかけちに

○今案和名集に云文字集略云磴道（士鄧反上声之重）漢語抄云夜末乃加介知 山路閣道也

一 まくきにおもまよる涙

○今按後撰に 伊勢

流れてとまるは時はいさせは家も涙におもまよふかな

一 氷魚もよらぬや河しも

河 鮂（ヒヲ） 和名 氷魚

○今按和名云考声切韻云鮊（音小 今案俗云氷魚是也― 初学記冬事對雑有氷魚霜鶴之文而尋其義非也）白小魚名也 似鮊魚長一二寸者也 文字集略云 鮊魚（音白 漢語抄云之呂乎）魚薄身白色也

一 あや花舟ともに紫ころつと

○今按新古今 寂蓮

並てゆく柴の流は花も霞におもふうちのしは舟

一 これなくてかなしく

ちるをみてよめる之

○今按此候考の哥に

水鳥とおのへとやよそにみん家もうき舟世には在りて

一身さへうきてと
細さはさめの志つくるぬて抱志よ身さへうきてもゆかぬるは
〇今按此歌何も出處なし
一ひをむしよあしたにそ
〇今按和名云唐韻云蜉蝣音浮游漢語抄云比乎無之朝生
暮死虫也
一とさしひこきあまへり
〇今按とさしひハとさしてめくといふ事なり
一かゝみハ吉野乃桜乃ことにや侍るへし
〇今按うへとハ行つくるハの心之おもくハなし
うへと返さるハらかたし

一おちの河ていてさそはれへむす
〇今按あふ道ハあふ道に同し日本紀第五崇
神天皇紀に道のまたをちまたとよめることあり
あふみちと同しく我おもふに知へし
一あしハさへえし
あしる河にハあまも行ぬへし志道に出のふ人やあらむ
〇今按此川の歌何よらさあら知し

枕の事

一かつら山ふところ
○これ業平斎宮女御集に 何これのさ海やまい
乃山ふところとは

一咲桜あまたん今ひらけそむるなどいふべきさ
ろなる
細
桜咲さへの山のさへむさく桜あれ成ちるさくあり
○これ業比川歌 何とうかあるなり

一河そひ柳の
河 六帖貫之歌
いなむしろ河そひ柳水ゆけはおきふしまゝとその根はたえせぬ

○これ業比歌ハ聖武天皇の御歌を載られ 貫之
六帖第六に題桜の歌に
ひとえ梅をかへて桜の花かえてもしるに咲ハさかりなる
鶯のなく枝をわたりハこそハいろそうつりまんとてまん
比深に柳とて今のうちあるなる河海にハ上なと
うけて貫之歌と見る後人の六帖
ハ作者を志るべし他の勅撰なとておなしかなす
要みてこゝろ知へし中にて鶯のなくつる枝なと
河ハ柳遠南名によみ人志らすの歌にて貫之家
集にも有きをつけてかるまて知へし

一山風に霞吹とくあまたと海てふ有るちるの志ら浪

○今案 後撰集中
詠二ノ雲路にまよふに忘れし霧吹ときそふのめくる風
一志賀のみさきの波ハ風てふも払ふきかよへハ志乃川をを
○今案 後拾遺 恋二ニ 高階成順にそひ
つてそえしおとし待ちさうれ手道れそよめる
伊勢大輔
こゝろあてて何ふうみ海にかゝめ吹くふくまた志賀のうら風
紫式部と伊勢大輔と同時なり 大輔ハ高階成順之
まも後に出るとこゝ手道ハ源氏より氏家も
後なりし氏家大輔か秀句之下句ハ此乃家
をよまるゝをししるへし

一水にのそきたるうら
○今案のそくハ臨におなし 詞之中勢集に屛風
の絵に山そて家々なりむそこに池にのそきたる松
並りしに遠りとそ 垣の見えたるのそくといふ
も乃こそかくしてみえるれなるへし
一河の屛風 河 籧 屛風
○今案 和名云 説文云 籧篨 簾 竹席也
方言日 江東謂之 籧篨 渠除二音 和名世師路
くまにハあむしろを河しろといふなるへし
一野をつきて
つきてしも何にかつゝん秋のゝのいつれ手にもあるかなしく屛そ

○千載 此哥何に出けるにかしらず

一 秋ふかき月の行さしかふさして山のは近き
こゝちするかな

八雲の御抄よりひらくゝて能しるべく
○千載 秋の夜須やまれり源家長朝臣哥に
秋の月なかくして老か世も山のはちかくなりにけるかな
なかる西の山へ近きをこそよそへひらくゝゝるよ
往逢これを月の明かたになすよりて我
乃山の近きゆへ山里の雲多之方物に
此山の道よもしと家長朝臣月の自哥すれ
一 家長て家の哥は何事ぬゝこの一とはりとそ思ふ

○千載 わかれしは菜乃彦につけて乃多やまへを

一 明けぬ夜のこゝちなかりし
何 明ぬ夜の心ちなかりしよ空に月をあくそとはたは少もや
花 会ル我心は縁をぬきりしすきてあけぬ夜のこゝちの事て
○千載

一 秋暮のわかれぬ雲井にいとしくこの世を如ととひたまはん
○千載 後撰に次哥は菱家万葉
記して見る まさるおもはなくはおのれさへかりよのゝ涙ゝらん
夜なかぬ身を行きぬまゝは白雲にとふ名るさへそらうとねたく

一今はまして妹山にましや侍らんもいかなる木のねとをり
はたのむべく侍らん
○古葉 後撰に
青葉の上は妹山にましや侍らん梅の花笠何ととふへ
兄は梅の花さきていふをふくみていかなる木の本ぞ
かはと古今の遍照のうたをひきられける
一雲きえにつゝ侍るとてさはのせり
雲間に袖はぬれつゝ川かも春の野にはるかつゝれも 中務集
○古葉 流布の中務集にはけふ見えて侍
一雪ぬれきみ安かの世り谷にあはつくりえやさえおやあすて
中君の御へ 君子の河さ女はたらきめるにつきんや侍

名のき菊もなに花みえ
○今案 万葉集十に
吉宮のほそたかるつまたゆもしたなるかそに君を侍らん
一いろあかりとりいふめるひはいとちて
○今案 いろるかり いろを玄謂ましたるやひ
もいはそれひとそてうりいろに見ゆるかるべく僻にいか
たそうひとといふ 和名云尓雅集注云鴗音立 小鳥也色青
和名曾比日本私記用此字文作天皇実録
用臭虎鳥三字今案臭虎見第名苑等
翠而食魚江東呼為水狗
古事記にはかわせみとかゝり 和名かともそにみそう
ともそにとうとも云也

一むらさきのうみにうかべるこかね

○万葉 紫帯金泥のうるさき短冊の世もお

てはうむらさきハ紫の紙に墨にてうかべる 紙も

何之

総角

あげ巻

一たゝり

○万葉 和名云楊氏漢語抄云絡垜 多々理 他果反 垜ハ

梂と同じなり 延喜式九月神嘗祭 説文云金銅

多々利二基金銅麻笥二合金銅賀世比二枚云て

又同式に楴の字も用ひられたり 和名に椾の字

なきをあやしとよめり 若楴を誤て椾に作て

假名をつけたる也 細流に引出たる令義解に金銭

梓とあるハ銭ハ糸の本字にて線に作れり 官本に

但たゝりのまくらもあるをもたへハ何のたゝりにつけてたゝ

とけるを絡垜に 出宗たゝりなり

一こゝろなしこゝろは玉にぬかなんと
細より何とてなかりけるなきを気すまして古調には玉にぬかなん
○今案伊勢物語云 つ[illegible]にたゆまじくさて云語
ひとへ絶つひとに宵よりけれど是語るれる何事まし
くやしく侍しくて つゝまほし人さなかり
けつまりて夜昼なきとひかへてまつるよ乃ちの
御かきのなりにゆかしくなりぬ事のある日何事も
とひりし人志もよなんこそかへりける人の
人何用ありて御かきのみをおもしれる志もなき人
いとはなりたえそのゆへかなり志て今なるかきなとし
語てよハあめをなんしいそしてなりめ侍ると

奥路の歌によみてすのよさの海にあまもなけつへき心ちすれ
○今案 此歌何に出たる事歟
一おほえをわきそそめける山路に運ぶぬかき糸と されや
○今案 此歌の詞をうけて おほしえをわき
てこのたのこゝろふかしといふ歌にあと川なり
一いとしきまきみの音にめもさめてよハの何しに山路に
こゝちして何りし事語
何事ハ是も山路にめも何を何たまてこよひ何つる歌
○今案 此計歌何に出たるにや 推量するにこ
の詞をえて後人のよめる歌にそしうあるようてこ
なりけるハ何ゝさる語し

一こゑるの山にてハいて侍へき

○千載集に家持達にハおつまの里にてる八何事と
とある事と第四句第十八首にハこゑるの山にて何事え
今ハ方角にあなる用ゐり第四句ハかちにて
引分をいれんとてこゑるの山に借て家へき
了ハ何れもといゑりて八御ある家ふこまひる
いいて侍んといふて哉　本歌ハ定家への序にて
似たる古歌も何事え加へ切り

一常乃山里いかなるん
細波や志賀の山里いかなるんなくも人まへや神のぬまん

○千載集叫引家ハ　新古今集名ある寛和
二年歌合によるへき事て独句いかなる
人と入るなり文本歌第二十首にハ寛和家元好忠
独句いかなるん落句神のひつれんとある寛和の
此の家なる事え用ゆへし

一いつより秋ハゆきにん山里の露の上ハ色こきことの哉
孟見引し歌ハこてたとえる句に秋ハいつよりゆるそ
となり

○今案八家ハ殊なく歌みなひ事え其まを
秋ハゆきにまんとよそえて歌後の歌にあたせ
てみるへし　孟津の泊にたす

一秋来て満さまさる本のおとた吹かまし　君か手の杣

是ハ松風の吹とをるやうにきこゆるを庵ゝぬ句の心
を家とよミ給へるなり
○古集此物のんけたる本の中にハ子のまにて立
て姫君のうへ下の句ハさみてに遊ぶをさそひ
て松風に吹なるそと云木の中のさひしさ傷
さらハ猶ふるの中うち乱之是ハ皆人の御近に来りて
いさなゑてわりぬふるを中君ながら強りおき
くまむしめす下の心をかくよりきて上ハ公家
乃御傍をもてふるまなる乃こよまき給へるなり
そこを下より下のたまうたる給御心ゆかし
さてみたまる人あれてけりしくりつきぬ

えましましもとハいへる心
一とことしてこなとおちといひしは姫君もさ
きそてにくておはさる
細白ま乃心
○古集これより業子地たうへしくらなると
いかより女の葉乃心をいくて心え白露ハむ
すをも迷なくしよそのふべきあれ像まを
まう吹ねられたとてにくききてハおはす
まししや
一むなしく出なん後のいひ出ても
○古集後拾遺集 恋三
和泉式部

何さんは昔の事を思ひ出すにそひてこその道よりもなほ
ひかれたるに似たり　同時なほまさりたるを用
てかくとハいはすにハあらん

一 かほをハいとよくかくし給ひて

○又案前漢書外戚傳云初李夫人病篤上自臨候之、夫人蒙被謝曰妾久寝病形貌毀壊、不可以見帝、願以王及兄弟為託、上曰、夫人病甚、殆将不起、一見我、属託王及兄弟、豈不快哉、夫人曰、婦人貌不修飾、不見君父、妾不敢以燕媠見帝、（師古曰燕媠不嚴飾也、）上曰、夫人一見我、將加賜千金、而予兄弟尊官、夫人曰、尊官在帝、不在一見、

○媠注同 媠与惰同

上復言欲必見之、夫人遂轉鄉歔欷而不復言、（轉鄉轉而嚮裏也）於是上不説而起、夫人姊妹譲之曰、貴人獨可不一見上属託兄弟耶、何為恨上如此、夫人曰云々

上復 歔

一 ちのやしろをひきりけて

哲をひつるその何よりも生ぬ迄ハちの中のをもうなれぬらん

○今案此ハ何より出つらしく

皆撰に

ちえやする事もうこそなれぬとしき事めれハ

比事に似たり

一 きりつるを思ひ出ても大方なきたり来かけて何たのむらん

細 或説に今まて契給ひし事のかはりゆくまて

思ひ出しける御詞を打きりけて何とも数も敢へずそと之
○今案此詞ハ落句ハ何たのむらんまで
句ごとの何とのめのふそと読るをこそ云ふる乃
むとふるに従ふり落ぬるたのめハ合点なれハ此さ
乃むも合点とうきてよむべきなり

一 行末をうしろきれと思ひなハめのまへにたよそむかさなん
○此案此上句ハ中君の家の下句 句二家を恨て行
末りけるふ御詞のたのまれぬんなるハ中々に
うりたやとふけるも行末の契をうしろめたき
とえ読ひけるよしきふとみしりきまの
え為まちてとなり

中君の恨るるをハ此て御契をしりかりん事を
おもふといふ才乃心かまり返歌の体之

一 依違なきハくるしきそのを
細いそいてつまづいはき人々才たのえてくるしきものと思ひし志き
○今案此家何ゆゑおもへるより 古今集恋一
人々來るとのもかく恋ハくるしきそのとへにさしきん
拾遺集 恋二
恋するハくるしき物と知らすらん人を家身にまつりなさせたや

子蔵

一 いはそき袖のうちもつゝきも

○万葉　和泉式部

苦舟のうきもつきも出つきも誰にとふへき人のつまなき

一 これハこゝろたえ人のくやしくて侍るたくなりとて

供養 万葉今本タムケとよめり

○万葉供養の二字を萬葉集第十七ニハそなふとよめり

然るを何をハ假名にてかくへし

中よ何ゆゑ　初穂とよめり三代実録第十八　延喜式の祝詞乃

にお稲を神にまつり給ふことを　祈鑄竹之早(ハツ)

穂二十文ニ云　新穀を神にまつるより起る

詞く

一 君まとてあまこの妻たつゝしらハつまを志きぬ

○万葉　柿本人麿　天暦御製

いつれとも君そと思ひはなたハ法の為そそれハつゝ侍る

此歌ハよくそへる物ならず

一 此妻ハあれまつ見まん

○万葉大伴句ハ君なくて誰まつ見まんと　友則か

よめる一首ハ人をあはれとこそふくも見るやうに

一 あらしき　年とも　いへに

○万葉

わかきまとも見まほるまのハ織りぬる人のなさけにあれ

一 かひくしし　地あひしらひ見え語める

○今案ニひく〳〵とハかひ〳〵何かはの色之常によい
ふかひ〳〵くハ甚事によくまして なんかぬ
方よい候り

一 いはせの森のよふこ鳥めきて
細 花鳥の箋に云
恋しくハきてもみよかし人つてにいはせの森のよふこ鳥かそ
人伝てなしてその尤ゟこときまて見え居りて
ハ何まゝしきといふへきをそれをハいはひのこし給
ふとなり
花いはせの森の呼子鳥のつゝ志りと志るする古歌侍
らねとも人をこえていはせて恋しくハきそても見よかし

乃歌たゝるこ云お遺りやいはせのもりのよふこ鳥
忍ねうとハ人つて和ぬといふ色之いはせの森を
いはるこの杜と多く源氏の一本何らと云ゝ
○今案花鳥にいはせの森に志るとしねる古歌なか
しとのこゝまゐるハ誠に細よそれねる寄納なとの
まして云萬葉集第八に 鏡王女
神なひのいはせの森の呼子鳥いたくな鳴そ 吾恋まさる
六帖第六にも入ねり 其の歌の事をうけていはせ
呼子鳥のいたく鳴やうに恋のまさるゝれはんのこと
をとしきこてとこれようしの歌ハ何によこにか上るめ
らぬ歌にておなし川かなし 又一本ニいはるこのもり

ともみえし　六帖第二巻の歌ニ
咲けるこそ咲ひは山吹のいはねの影になく蛙の
此歌初の岩根の影の歌よりは深切なる趣にこれに
ていはねの影とかゝる本まてゝいきなおもむきなるよ
趣はいかゝまれても　おもしきうてそ　花も御説ハ
みえかゝさるへ
一袖香連て梅はちらぬにおひて猶あはれふかゝやと有
〇玉葉　後撰春下に　伊勢
袖ふりてよりもる花をこゝろよりは袖にこめぬる風の吹もこきあへん
袖ふれしとは大君の袖ぬれて薫物のやとり
きたならしこれへやと山をまかんのにほひ

一いとふによそへて
何にくき様まてたの池の都ぬかそへはいつかまてにあるをまてそ隔
〇玉葉此哥常にもふれて川部その辺の何
よ何ぞ哥りつ　後撰恋三　拾遺恋五
あはれともいふなるそとふかいつみてぞハおもひもうちはき
一まみれて川涙の川に身をなけて人はおもはぬ命なのまし
〇玉葉此哥は古今に
さきさぬひとりなきかなふて我のみぞこぬ
此哥を命の底にかふおもひて大君のなかりまても
のをくこころにおくてもかひをたりよりはさき
よる川涙の川よ身をなけましその底ともよあるなくし

一よしや吉川して
〇万葉集尼ハよしゝあをといひて志ほあまし
こゝろ也
一人しらぬおもひそめたる袖の浦にひろひとり玉をたもし　何まかふ
細　袖の浦ハ出羽之　新古今に
なかめする何まの志ほ屋のけふりかゝる袖のうらにかな
吾長居らぬめもきとゝ　永禄元年十月八日
御説付属也
〇今案　袖の浦ハ袖浦とも藻塩也　新古今とそれ
猶あるハ金葉集　新上に母の歌の返にむせて
ぬるよあるらこゝや

集云志ほゆあらふ君の海のすへまうりたりけるま
こととりふものをこころつつみて歎なるむきあの
まくへつりたりとて　平康貞女
いそなつむ入江の浪のたちゝ見るまでの命ともらな
云し　むす免
なかめする君の志ほ干てきるかゝる袖のうへも玉ぬ涙や
かくあまハ事遠へり古今に僧正遍昭の諸人ハ花の
衣になりぬなりとよみ　歌を下に嫁めるにも
たり
一ありま通ハ嫌き世をいひけるをこゝをちがはになさきて
細　かゝせていひけるものと申りあて身をちかひけるかな

○又東山川にハ形古亭 新中ニ東三条入道
白者故志乃歌にて 海の句にや 宗祇川の二見ぬ
ものもなけきぬるかな 何ぞ圓融院御述し
まきて下句大きさの歌の時をまつ 次の歌の後
乃福まて起し

一 なかむ道ハ山より出て月も草にこそ入ひて山にいるまて道

○今案 土佐日記に
哉出て山のはにみて月あ道と浪より出て浪にこそ入道
今ハ海なれと山より出て山にこそ入道ハ此貫之
乃歌をとふして すきこひて ハ澄と候とそか
けるり

一 しなてるやにほの海にて舟のまほならねともあひみしものを
河 しなてるやにほの海にて舟のまほならすも ゆき遇てみ

○今案 此川家万葉ニ見る事なし 万葉の物
なとも志てる人の此ゐなし 左も覚えすして古今何
とも云さぬるにおほつかなし 六帖なとるに見ゆへ
き歌さ女なれとそれもなし 何より出たる歌
にかおほつかなし 此志なてるやハ聖徳太子乃
片岡山にてうゑ人ハ万葉第九ニ片足羽川と
つけたるにあなし それハ階のかこちひ
まて異字に降る人もそれに志てる之ハ片といふ羽
まし乃人とそ之り照ハ刻といへハ階をふめて

とり今のしあそも詞ハそれなりそつく
ろこゝろわりたるへし
古事記中巻應神天皇御製長歌云
美本杼理能。迦豆伎伊岐豆岐。志那陀由布。佐佐那
美遅哀。須久須久登。和賀伊麻勢婆夜云々
又萬葉集第十三云
師名立都久麻左野方息長之遠智能小菅不
連尓伊苅 伊苅持来云々
こ貝とりハにほとりくゞりそてうひ出て息を
衝ねなき丈道をおもしまゝして不堪
きのふよりをのこまちたんしあくしれこゆふハ

布と弁と同類にて而出たる志なこもむ能
さてなきちハ藻浪路にて近江路さもくし
とハ俗にきこしと所といふ同じ浪の
あとより浪ことに来るハささえその継似さ
るをよハき風によする浪なきハ浪ても浸
ぬんるにそらこゝをむとのこまふあとえてつ
ねハ志なるゝ由うとして乃ちえうあるその志なてるやも
此御製をそんなし汐の海といふハ浦の
海なるてにほひのめの海といふなや
又日本紀第九神功皇后紀云忍熊王逃無所入
則喚五十狭茅宿祢而歌之曰

伊裴阿藝○伊佐智須區祢○多麻枳波屢于智
能阿曽餓○勾夫莵智能○伊多氐於破彌破○珥
倍迺利能○介豆岐齊奈
則共沈淵田濟而死之 此より起る名也
和名集 近江国野洲郡迩保 右南北
迩保郷もにほの海より おのつる名也とや
さてなにとてつけさきともにほのみ海とて
けるハ其の如く 此まよききさまなるのやうに
波のうみにほの海とも

寫本

寄木

一あまたの藻くつろひたてゝさはりなるところ
細くつろひたておりてこそころふりてなのま
されたの古き縁之
○そ藻ての中清むへし 此藻の下よ藻のまゝ
よろもくつろひたてゝまさてつくろひあてさを
縁へるハ串く おそもきるいかれるひともとれかの
らんいと見えところとてくつろひあるたるこそ
又徒然草稲羽の神在月の津ところかくこ藻のくつ
ろひさうなるふといへるくつろふ事のさはり
なるくつろひさるとさはりなるよハあしく候

時にそも〳〵知しられて好一さうりやるゝ
菓の徳

一あくまさへ起てしらり
細
葉ハ花なき二紀の名景也やかて清き起て河ひなり
○その葉ハ汁ハ何よ初てるまも志りよ

一あしこめとよ
○その葉りしこれまるゝを何て同額までゐ寸

一なかて加て寿るゝと
花
落涙よ松の風の音き寺ハ何よかて寿る起と志かし
○その葉ハ汁ハ何よ初てる方文金堂の方ハ基俊
乃むもの色紙系方商りうゝ之

一古今の月ゝよゝる忘よ傷有るそ忘れぬ君ゝ
細川方元良親王の
太平の月ゝよ忘よいきの花見のまでもゝる君ゝ
とこそをきらし川久ゝり
○その葉ハ汁ハ方元良親王家集よあるゝや集
なるよハ又ゝぬゝゝえ

一梅の匂きめへきここちの花見れん
○その葉 六帖ゝ立枕
ひとりねの床よたまれる涙ハ石の枕もゝ紀ぬへきゝ之

一こゝろむ方ゝゝ おもひやゝゝ なゝく
○その葉ハ汁そひやるハ思ひをやる之万葉ゝゝ一ゆま

多くひやとよめるハ皆これよて想像をおも
ひやるとよそてよそのゝるをさそはんなど
おしはかるやうふよめるハ第拙るよハ一首もなし

一 おもひやて山の月のこゝろすさみ乃ゆりて　和泉式部
月をハ誰も同じなくさまぬおもひやて山の端かしねと

○ 万葉抄 此句隠るハ擬想遠離て萬事絶
永年之毎に古今の歌をおそしてこれ
など八雲説とせん

一 おもかけしまや

○ 今案 万葉ふ第十二云
むくまハおもかけしするおもひよつきそ見えまくおもしき
君かな

琵琶行云　猶抱琵琶半遮面

一 隔つるなかつ隔て見えふたしとなる人きよ

○ 今案 絵てハたまひそて像をおもひの哀をそて
かるなる人し 又ハ隔てなしハ一首も見えそて
まなれたし隔ひてとそておもなし詠るまねるや

一 みくまりしきゆきかな

○ 今案 見る月のくもしきえ見ことかりぬをいふ

奥按此哥拾遺集
三哉万葉よハ思
ひまさん心を
とも有

まハかそれり 万葉ふ第八ふ
春里のそひまさんむすう見了歌々梅の花ハ

一 大空ハ水やまひおをひかりの香ともめきし梅のくれかな

一あやもつゝすゑんうりなきも
忘れて袖をのこなけハ貴妃の枕のうへに何事そ流れある
○そ業 此歌出家をしら㞍
一たゝ世やハうきなとやうよおもたをそて
細世やら知人やハ流れきゆまかるまするも忠の家へそうき
○そ業 此歌も又お示をしら㞍
一年きこまもやうけ小孫ハかくれそう
○そ業 古猶 釈阿よ
秋山の月をら代花の花も成く年りと袖をのそそかく

ゆきとえる不ひ歌をきあり
一いまのみもまひしきるころなりうれる
○今業 拾撰忘一
あいきりし附いらありし哉とてゆ庵今のまも思ハ忘れき
一ことろ志らぬ流しさのとなん
有ん志選ハらぬおんをなをもかくてころ志らぬつきあるん
○そ業 此河歌お示し流をころ志らぬ流し
さなきらんとハ志ひてつく思ふころん哉
てころんも志らぬそのりおと見るなるえし
一まつ思ひまさて人なきんのと痛りそて
○そ業 拾きし 忘四よ

思ひまくらへかけまいハ手後にまいる新とねるのそなく
一 わきまへこそさきるなと
○ こと葉 六帖に
人こそハ新こそさきに志まいなあつまいあきかても何か我まん
細流に廿五をしたへ（なまい）いと川のえるハ誤之
一 人のかくいふるうそくもえんならんも
○ こと葉うるてハ蓑家方様に 別様とかてそ
無まへ也
一 けふそ志らさやまてらぬ
○ こと葉古まいハ葉の詞にむすハおさへ無るいと
くらしり侍そのもそれとまへるハおもてハ中

君のあまてらハ歌忠ふ思ひをそえていへるを
うけて花なそといひ殉の上をおもふするたるやん
めやもくらぬくこれハ中君の葉のふのめきかて
るをとるさく思ひのふなりけていふり
我ゐおや此ぬ思ひにハ侍るの我もねるむつるく
一 こうなしやこうときとつもとあひて云へとおも
しておもこを経ふ
細 落の哥之 五日 河和 蜘
瑛 又云本にそうつきなるむしのうのおき之 蜘
○ 竹治切 班身 男也
○ こと葉こてふなと古こうそ引とるといふハ花の

蚸と訓ミしハ木螂といふものゝ訓なり螂の中の名を
玉篇に班身小虫と訓りてたてよむべしと
おもへハ推量するに猶のやうに似たれハ
写誤まるを 舛ちハ此本の中に付て玉篇
を考ふべき也 和名鈔云 野王按 蝻 女能反 与蚺同
和名太仁 今有小虫善齧人謂之含毒即是也した
といふ虫ハ初ハ蔭くてひらたなるが大なるとふ
くひつきて 目を額まハ唐鍋子のあしに大さも
それなりになりその名本るにつくる事ハいま
知りたる事とひ本るにつくにたふ何ともくる
ハ叶たす

一川海ハちりくけそうりもあまりハ
檃古之 もえきと曰之
○玉篇 殼説 それハ 殻之
一むしりこれをもふかしひてもつくにつくて
○玉篇 此同躁大日踊跳 一引記よ虫ふに似たり
祓跳をえて本つく不をも得ぬべし
一あふ出ね抱足かり 志の蔭まてく祓の雾さけりて
細葉の蔭一種枝なる何りといふ説之 但穂ふお
さる生えをいふ説 志のすきふなる生もの
るるおかし 説ハ穂よ物さる枝剝之といふ説非矣
○玉篇 萬 紫ふ可十なる

妹かりし家にひちの志の藤家にかれてなひけ候所
又六花に
なに竹の枝さしかえ候志の藤に生せて尺六之君ハあのまし
右万物の許に有る志のすきといひてそれを志の
所といひつまりハ志のをゆりて志のすきと云う六花
乃前もなに竹に枝さしかえすといひのまきとき
いひあれハこれ又万物なるおあらし能まりハ志の
藤ハ花る出ぬあらして新芽なるを花る都花
まもよそたるハ種る至りて根迄るなるへし
菜葉なる皮酒をすと出て志のすきて跡しる
詮方するこそ何りて種る出るとよめり但

皮酒しすハたるこすきことよむ一まき能と思ふ
花菓何りそれハ別に酒にて花の芽の種に
よるふまそるに花る出ぬにあら候花る出たきハ出
ぬ花るにおそへて一義あり万菓ふ九に花ときふるの
まき田の花るにハ出すとも第十六ににまさき
種にハ出ぬとおほそひとるともよめるハ花る出るも花
しりて種る出ぬといへりそれに准ふへし

一 葉のまはりよくもうかひたそて
細葉のさかりなるをいふ

〇花菓ハ御酒得之上すも汁袖ありてそこに
汁多て酒ちしかきし　然ハるこてやうかふ

はたいふるいろひて此るなりしかば時の一盤を
又とて搔ふ抱なるるまさよくも此るはなりか
つねはまさよくおもいふりなる一ゆゑる
かなりんいと見示何りていろひあるをとふ
まで前後あ示をこえし

一御そのなれた
○万葉詞花雑下　志のひするをとこのお
ともろきぬをかりきしとておしのけまた
和泉式部
音もぬるきおもを身に近くなるとていふ人もあろう

一まろちかくめさるを歩みそれまた

四阿

○万葉かさめのかきし清くしはたかさめき
きよひかれいく

一ちろちしひていひあろあられた
○万葉　有(ココロ)意(ミエ)
日本紀

四 阿

一あてひともおもしますなす

○古葉あてハかきこりきんとあてひとといふ也

あてめくあてしてなといへんとくあての川

かくあてあるハめでたき紀中なるをこれらぶ

まくのあてめくなとえうきるまうでいふ之

一こゝろひのそうハ

細てねとハ悉皆 虚言よかくぬるの媒介

ありそもかくいへる 數多の中の不とよ

のをえんき 数多よりなるへし

○古葉こゝろひハ日本紀ニ皆紀行とかく媒の

そしてあるいまくはりあるゝく

戦国策 燕王謂蘇代曰寡人甚不喜訑者言也（沇州謂欺曰訑補注曰 訑徒案反或作詑）蘇代對曰周地賤媒為其兩譽也、之男家曰女美、之女家曰男美、然而周之俗不自取妻、且夫處女無媒、老且不嫁、舍媒而自衒、敝而不售、（敝猶敗無成事也、）順而售而不敝者、唯媒而已矣、

一いとまうくしこき君るて

○古葉史記よ速の字をまうしきなると讀り

一そくりしこうしといふまや

一そゝめきあくふ

○古葉 延喜式卯八大殿祭祝詞云引結

葛目能鋑比取葺譛計草乃嗓岐　古語曰蘡々岐

此うきくさハ　例の　噪ハさゝくとよめハそ

めくるそてなとうよめるき例　草のうき

とハ風なとよるさゝまきなるをいふなるや

とゝとそれハたゝりしのこゑをいへるなれと

やかけハさるとれ　諸岳秋奥祇云素髪颯以

堅領（エリクヒラ）　此訓の字を門字にハ用ましきや

一　世よあふまえん

〇　え葉あふまぬとたゆまぬとおもふあとたハ同

頼みて　無きり　崇張純に道の字をそへ

るとよめり

一　久なりし人かりに久遠ハ何るた

〇　え葉あるをとハさそも見るをえ

一　うきし世のあたれなやしても夢え引

豆　入道太閤ハこれハ花陸ゟ何る名えそ

〇　え葉えてのうき　さ世のうつなえし

二　いえ木なりしねん

〇　え葉　兼埜ふ弟四　　家持

加　かくたらこひつあすハえ木もなましおをおもハすして

一　久まてなりぬ身よことの思ひのことをや

殺ぬぬ身にハ思ひのなれ例しくなもしくよぬて袖かな

〇　え葉　卅り何より　おもへるにうしろ

拾遺 雑上 第今し侍りける所よ
恵慶法師
たゞなくてなきをの事ハおもひよれりまくてふこそハ御くしぶ
一おそろき人にて
○此案上まも承て古流拾遺を引て済き
一あきらおもひうて
○此案拾遺 哀傷
和泉式部
性空上人ハあるおもとおもひまでよみて紀か
一この御事侍りさてましかハ
○此案これハ浮舟のめのとの一向おもはるそし
ある所にて浮舟を見とこしましてそき

陸の中君の沖まての人にちかく宇治
にいまするつりき事ハたよりもなく侍るとハ
浮舟を母ハ浮舟を思ひ宮陸のハ中君を思ふ
まうき舟にかなりて宮陸の中まてハ思ふへき
たよりなくもむつましきハ何ともとふこと
一さハたすかれまて
旦 不放逸 仙源抄 流離
○此案不放逸ハ乗く暗拙之流離ハ日本紀
まうさらひとよめるたふるとよめる事なし
たふれまても不浮之よよりふこそ
一いとおほろ御らんなれんをすもえほしやう

○万葉ニ不拘詠

此歌万葉第四大伴坂上郎女歌一首
夏くずのたえぬつかひのよどめれば
ことしもあるごとおもひつるかも

坂上郎女

一 こともありける
○万葉万標ニ第四
夏葛のたえぬつかひのよどめれはこともあることおもひつるかも

一 あひくもあらぬやうなる
細 宮そんもなくて此時夜の来ハ行ひても逢ぬちちそれ
○今案 此歌何よりわつらと志[illegible]
一 いのちの侍らんやうなる
○万葉いのちハ千代さへつらそかゝるも志[illegible]

ふるてきれ倫ちえしを何ゝくおなれた淳舟
の毎の淳舟た思ふのをなく陸するやうなるも
なれもそれとして ことさらなることゝもとく
すんても表なるをいへり 細流る瓶の超まて
疑人お隆きよしに派しのみとよらしぬるの
ともに行くを張そらす道侍とうまへるまで思ふ
へしまさいのちといふ物ハこなたゝあるゝ子を
いさなひ行きて それをそゞめつとそいはんたし
あさるけハその心そていふ也

一 ひるのあめくらもくもゝめきてくさ
○今案 延喜式二十二民部式上云凡飛淳同毎

年貢匠丁百人同三十四大工寮式云凡飛騨国匠
二十七人以九月一日相共参着寮家不得参
差 飛騨の匠より都へまいりて木こりを
のこをひくのたくみといふ 万葉第七巻
たくみのまきなくてふ河の川とよめるハ杣人
なともいふそ見えたり又もよろ津の材木を
木作りして出せハ此もいふへし

浮舟

一 まことぬ扨よハ河の事と思ひしめゆきんるまりとしかん
細りてこともは ぬれたるといふ也 五月日
○ 玉葉 千代の河上となるハふかたる杉こ
そ付て年ふるまて へかれと但千代ゆかきおな事
ハふかぬ枝る花るまて浮きんなまて思ひて
めよ千尋なまりなりと志り給へとなりまて
ふかぬたといまこともふれぬ人といひてまつと
志りなんハ何たまつにりなくんき未舊といふな
千尋のんのこえそれをれこそそれをまつとハ以
ゆれ

一こよひ逢ことかたきよしを見えさせ給ふ事ハ

○玉葉雑上　詞書之　讃人ハ実一

秋ねぬる夜の月のくまなく見え侍りし夜ハたてまつる

夫木抄　第三十六　和泉式部

ねぬる夜の夢をさわしくみてハあやなき今宵のやみのうつゝん

一人ならでも見るよしえまゐらせす

○玉葉　後撰集

いなきとも いひなたれは紀物ハ身をたとるとも さぬよ侍

千載雑中　紫式部

数ならて心に身をハまかせねと身にしたかふハ心なりけり

一世にしたかふ身にさきたちて涙も色をかへしまいて

よしへしらん

○玉葉拾遺別

わかれ行涙こそさきにたちいそておくれて袖のぬるらん

在拾遺別　中原利成

いかにせむぬるのこゝろなれといひて別のさびしさはうらん

一涙さへあれとあらき袖のせきあへけていとゝ別をとゝむるそ

○玉葉　紫式部

何ゆへの袖なき袖をぬらさん露のおきなんてきける世も

拾遺恋　御匣のと納言

なにむかしもかゝりやなきんなる涙をしるもえやいとはる

拾遺雑一　源雅通朝臣女

わひなからやうやうなふ涙こる袖の紀時ハ物かやはする

盃酒をさへてきらぬまじハ分たいひてそめんとゑ
抄 吉数なりて猶なき 神女人分をもえそめぬと
なりきらひある事也
○古葉 盃準なり 抄の説ハよく何ても
一汀のおもてふの馬の頭おとさへとも不
そうぞれあり
○古葉下よ云て白家の御説も此歌
強古今也
かし人のこきあおふそなりし 渡まじとぬまじぬ者の大ごゝろ　寂蓮法師
一家もまめしち歌て
○古葉 抱仙窟云 五嫂曰 娘子把酒莫嗔（ニスメツイ）

一わかなれしまおよそくちをしくあはれを
○古葉 くちをかくあはれなまじハかくあのかも
し清てよもへしくちをしめし歌ふなとあ
らハに思ふを侍りてつくれる濁へきそ
一家の君きたの歌をわけて君にそまうふるハまいと付
○古葉 形古今雑一　土御門内大臣
朝たけのこほりふきかて君まつるなうそかこき
一あやのこふたる不さきあるそて
まつの行を見用られたり
○古葉 或説中家の御いまあるを不せきとハりそ
と何ハ謂へけ家のんなるとこくし　但右家ハ親

のまとる娘をよそへしうそハ下句の心を用たり
一かきくらしそれ世ぬ雪の河雲まよふ起て花やかさをもあきや
細河雲ハ雨雲天雲の説をも不用之
○其葉ても雲とも雨雲ともよむてと勿論之されと
此歌ハ其詞よ雨ふりやまて日ころおぼつかなる
所といひ白妙葉たわの歌もおもしろくて 又
かきくらしともうきて花やかともそへられ
雨雲とよめる之
一まつられハと返えてゐるを
志ら雲のたえぬ雲井よまつやかハ里よそれと思ハ郎ん
○其案 此川歌何より川せの見ゆるにかハいかると志

ら浪なき 様なるに行人のよするも海なり
迷てる歌ハ 新勅撰恋部なり
一せへ川 山よりこゆるとても
河 志ら雲のやへ川山よりこゆるとも思ひそめなハ尋てさうめや
○今案 此川歌何より出てるやいかゞ
一いさゝけなり
花さくらしきさ之 用心ちらん之
深秋のさくらかれん之
○其案いハ痩之 なときをいきてへなりといふ之
もし月のさゆて いまこへなりぬをいのさ
ときていふく 信よめてきこへよまて現人なと

もえいづる若菜 咲花ともよめるを 證とすれ
めづ めづ
一 墨ひくる犬ともの　定家卿
○ 大意
さしひぬるなのなかにかしこまれる竹より奥の人のすまゐ
一 あふりといふ物
○ 大意 和名抄云 唐韻云 韉音章 障泥和名阿不利 鞍飾也 西京雜記云 玫瑰鞍以銀地錦為蔽泥 今案則障泥也 後梢以熊羆皮為之
一 このところめける犬のこゑしきりに
○ 大意 上の墨ひぬる犬とものいで来てのゝしる

もいておそろしと河邊ハそれをうけてこのころの
とよめける おとにきく 万葉集十三の長歌の詞よ
いめさへしつ佛でとうでもまづ待君を犬おそえそ
枕ことにくきおのかはしのひてくる人見てそ
ほゆる犬ハうちもころしつへし
一 いつ川くまの身をなせてんと白雲のかゝらぬ山もなくくるゆく
拾遺 河 いつ川にともやまとめぬしら雲のかゝらぬ山ハあらしとそ思ふ
○ 大意 白雲の御前河邊にある桃園の前を見
廻てそこハとこ奉行ハ何となる色ハうけぬ人
ありといふ人をやさしとそへたり 集にはさ前に詠
白雲のかゝるそら みえる人を山の前とよみそへたらむ

これにても云にへし今の身の奇ハ思ひ切なる
猶よ川くの宿り世を捨むとハの山この山に入る
からぬ不知りとりふすを厭るよきてかられ
山とも跡のるたをつけにけりなかりも法る無慙
見つかり
中務卿家集よ
川とてもあたれなるを称ぬる月のおそれけあかくそ
或ほよ身をなきこともなきんと思ふさえしいりく
とも思ひ定ぬよし思ひる忘郎したるさみ
たるみしとえりらなるみえしとハおもへ侍
新玄女御集
こひぬ迄身をも粗ぎてなしてもおもたぬ宿からきもなみ

一 聲き思ひ身をのれ川ともなき紀けよ在紀名あかまえきそれを思へ
○ 在業なきりぬなきまへハ入れきんと思へハよるを
所り
一 めのとあゆしく夕えしてとの本ろうなゆめも
さるりしくと九こまれを川
○ 今案 最勝王経捨身品よ 薩埵王子の餓
虎よ身を投ぬふつき前相よかくるおもし

蜻蛉

一人の心まとはしくなやむ人をハいひしやくもみかのふ
なり
○〻東雲山童子四句偈を唱へて鬼神
の為めに身を投ふしかハ鬼神身を帝釈
と変して助けたまへることもありし
たゝ人の身をしむ事なる変定してうけてゐる
是ハそのまゝを心得ていかしくなやむ人ととるや
一まとふなる世にハ何かしとなん見える
○〻案又かゝることかき給ふといふにかゝる
こそたゝし濁る人きこえや

一そのかしきすちなる思ひ給へハそのことハ哀にて
こそあらめ乃んえ
一宿なかなのことひとりこち給ふ
細なき人の世をかよハく款けてねなのも侍もつけかん
○〻案けふ河なるに井て定家云なき人の花とハ
昔身ハ捨てられとらをかし人の御家あれたなき
人の宿ふかよひ何かゝとといひてまての御為なれ
ハ彼の為れて跡なのもなくと昔よとよそふると
なりひて侍るを何事ハ三条宮すて其のこれ
を補し給ふそても知へしなきこ人の宿と
ハかあふをさしていへるなり何きてけし

一 そひ出しもいとなし
細 なをなとらんのうちるに句の御出の表はさとか
そしらのあんなるのるにそひ出せるゝ　異巻曰
豆御使の人にけるに紀氏の御出世に句の御出の衣
のやしよハなきすよてしおもふに
○今案 豆治によりえし下に左近何とそていし
うなくと何う あくぬさきなれハ使ものゝかなる
こと見えしより
一 ますていとといしうさる人きゝてもかくもあらまし
ましハいうえうう あなを思ひしちて
○今案

一 これをこうあてさ紀とめあゝましうかとわきの之
きんちし たまへとくひなし
○今案 きゝしとめてきゝ之る清水の様にえう
一 御名をやきうしあひ
○今案 旬あ御詞伝説詞書説之御文なとゝえ
て伝説う組え
一 あわれるハ人におくれねと散なしぬ身にまさへてそる
○今案 人におくれねていゝ人におくらぬんえ
それをは人をなくなして後に弱る身にあしね

とこいふ名をうけゝるハ薫ハ浮舟におくれまへる
をうけ侍りぬなかぬ者をきこえつてふるとハ数
なかぬ身ゆゑさうしゐて今まて御名もやさ
てんのうちハ人におそれのある人の思ひまてひそ
おハしかり家も思ひきえつて身を沈倫をとえん

一 せきやるものさてるハだつうぞくにおよせる
　重 傍側也あとしかぬまそうきをいふ
○ 衣粟 放佚なるへし 放逸にして昇倍かう
　んといふや

一 まろんころうし 楷婚か
　重 して 宇治かうゝめしきてこえ

楷大君をさして 宇治の楷婚といへり
○ 衣粟 上よむもしの人の三のし 猪ハやしうハ
と同じ 大君をさしていへる事 略しつえ

一 こ行しきせまや
　細 いのつてためそわするゝを聞しかれきせまも遊れあふやと
○ 衣粟 けり詞ハよくけつれと 新古今に
かるせもまゐる初をうち川のたえぬえうに聡きつゝ
ひかるせといへる本をえちかゝるうまへしきそそ
いふやうまて不もらな屋り

一 行今うらん 初花のさ面し 猪へるに
○ 衣粟 西流にハ有無の御さ面をいえり上をを兼て

見るゝ事多くの思ひあるを自分のこゝろえとして
相少めかれても物和君の事く何てことのふ
とりふりや文上るわかき人〳〵多うつとひしるる
情なりと何題ハいかにしき本性あれめなれてさ
まてなき人〳〵をも和君めやるゝ見のかとえるゝうや
次に其意の本性をえるゝに見合せ候へし今更見和
哉とハ似てる事々にさきいるゝさまり花とえるな
見え気又名付る

一 赤羽の今にも見ゆる事ハ和きをおもひなれるんちとそとあ
花の見ゝハいとけもいさめたちあらんのそぬれてぬや
其意ハ内の人御ゝ何ゝるゝハなくれ候に倫んなるとえ

○ 其葉はいくところハ深井又ハ女一重のあるをお用ゐ
てさまゝの思ひなるの人ハいゝぬかりといゝすや

一 そもむ別ましくそひ世ゆへき由見なきひと

○ 其葉
わきもころきそてハすらみる末柄をも時のやゆかりと思へハ
さきてよ消息とよう何にあるる方にえ

一 花と云ハ名てそ何ゝとなれ母前もなくての歌る乱題やハなる

○ 其葉なとにあへゝたとうけてあへての歌と云う

一 いとけさゆかなるおきてあるにたくて作りとて

○ 其葉細画の御流ともに時えれ見ハさま〳〵の其意
の歌をおさへておきてなしとのいさんやうなるとそ

おきなきにくしとたえられていふ之ちなたち
下の句その趣之吹の詞文なり

一 なまよつりそてえし見しをたちふるハ秋の夫といふ
ことゝ

○この案 楽気が待断錆をおくハえし見しきを
たつとよあり之するえし見しをしふると云ふ相
つきなり ハり わきハなむるハと云ふを年ハ何や海
てきれしふるハ揺の字の仮名之断絡の字の仮
名ハ一向え こふとよむるなり

手習

至 威攬 河亭

一 いく紀士典

○この案 いくしと云ふまて 腹の字なるを 威攬
ハ雑なる唁拙とこえるり 威の字の音ハ為まて
仮よ何しぬ上るよ 音と訓とを合せて 威攬といひ
ふ意なりし

一 たいし 志き わきなり

至 退て なり

○この案此物語の中よ此詞あり 退くの言ひ
たいし訓にたるを見るゝも たまとしいふ字なれハ
てゆきしれハ 大としきにまて 濁りてよむへきまゝや

一しやくにてせけちを治ス
○本草蘿蔔子焼るすとハ護摩也 魔悪を
降伏する時ハ白芥子を用ゆる事へ增益日
論にもけしやきのやうなる事とみえる酒あり
又ひ物御薬の中にけしのるゐすくなしとみえも
おなし
一つきしこゝろもちしたるとのし
○本草着深領しぬる者のなり
一あし仏前にいそ詣でてこそ家をあらためこそまた行
へあんおと
○本草竹元物御はかくやひめのある事なりけり

てんれい物語へるハしきこれをこそわり
佛あふる事をひのふそおや本なんとて何事
そとえハなし
仲文家集に
あ佛説てんをよこらくのおそそおしてた家のきえ
あんなんハ叔なんまて末のまふ事婦るえたまし か
しとりふなさく
一つきたる人おんなおきけや
細殿母のよろきさ御ん
重よりまのよろくて物をいたしてん
○本草当帰の中よりまのいたぬハ何事なり
和よりもちたしいさたるハ皆よりまし あれたる

さてさくしこの人ちハさえやきてとそ知へし

一 終にかくれぬのそこもせんなりぬるを思ひて

○万葉第廿のてにハ物ちても事ちても叶て
そのゆへあるへきにや

一 世の中に松まつといひて人に志らし猪し

○万葉 六帖に
いろ松何とせられ手綱の松の思ひんるも大河

一 彼夕夢の

○万葉これなりいとねんころきこへてといふまて草
子の地まて上の思ひ出まてといふなりつまり
くるもおこなひをのこらしつとつくへし

一 身をなけし涙の川のたかき瀬を志らてこかけて沈みとそめし

○万葉 貫之家集に
なミた川おつる水上早けれはせきそかねつる袖のしからき
第物か第二

一 かきほにさけるなてしこ
あの川志らすとやかてせきまをハなかるゝ水ものとまらぬまし

○万葉
古今恋四よミ人知らす
あな恋し今も見てしか山かつのかきほにさけるやまとなてしこ

一 君まちもたまつのこゑなとやゝのことのいふにたまとハ

○万葉たまつのことハ蓮子之 和名抄第十七菓類云
蓮子尓雅云荷芙蕖其實蓮 音連 蓮子和名波知須乃美

一小鷹かりのついでに　河　小鷹狩（ハツトカリ）　万葉新点

○今案河海に引連たる万葉第十九の歌に
八姫小鷹狩（ハツトカリ）しかりし小鷹狩とハかの去似姫
鷹狩ハ去年たち小鷹狩あり

一かきつのなくころ紀第之かりとミえて

○今案　和泉式部か歌に

一なふりたちなる里もこころに侍りぬ連たし

一萩の花ちりぬるそくに音連たる

一いときせい大とくるなりて

○今案万葉第九に琴師歌二首ありて同第
巻に琴檀越といふ事の有此琴師ハ琴聖と同
しことなる

一ひと川橋あやしくりて

○今案　淮南子云若行独梁不為無人不競其
容　六帖第三橋の歌に
津の国のなにはの浦のひと川橋きみをしとハあらしめども

一くそしくもその所のことをハいとひきてつ

○玉葉此くたりハこの詞に本付た字体と
のまちかひなるにや

一所のさまにやと
重悪

○玉葉弥代純上に弥勝とうきそかんさると
よめり御れたるとハ人の上にてハひとくなり
せれ給ふともいふなる事なりこれに准へて知へし
悪ハ日本紀にさるありとよめり字義之
不祥 日本紀 不良 又休祥 ふさう
はよしといふ本道ハさるありとハ悪を不善と
いふなおなしさと

夢浮橋

一きこ侍るハまことにそり

○玉葉
みちのくの阿多々らの真の思壕にまさとかときく
ひころより頼の仏者の許る也ハまことくとよめる
なおなし許りてハふるき詞之

蒸蓋

一あまふうんとそり

生王家無等倫 日本紀 王ある子孫之

○玉葉つろむとありの詞本搞花の忠よりこなる
ふよりえくくりわつハ王家むハ音便と不
足ハ流通なとつへく詞をおもへハ王家統といふなる

亜了

一薹よハいとふかく志なりしるまきかみの山すむかひく
○玉葉まきかふなる山をまきかみの山といへり歌ふ
まる山を歌かみの山といひ弟の花おかかうる山を
和歌山といへるおほく　萬葉ふ第七提頭云
垣つま大よひつてとうする君まき山の歌しうき
山ふまてる中をてめよ君
まき山の歌ふ志率てといへるまき葉ふの山といへねとこその
とも葉ふこれいそかるる花

古事記中云　本牟智和氣御子到於出雲拜訖大神
還上之時　肥河之中作黒樔橋仕奉假宮而坐尓出
雲国造之祖名岐比佐都美餝青葉山而立其河
下将獻大御食之時　其御子詔言是於河下如
青葉山者見山非山善坐出雲之石𥑎之曽宮葦
原色許男大神以伊都玖之祝大廷乎問賜也
これハ假山なり　萬葉ふ第八ニ三原王
秋の露ハうつしなりけり水鳥のあを葉の山のいろつく見れハ
これハまきかみの山を水鳥のとつゝくるふとある
それんとてまきねとかくる花
真千鏡見名淵山なとのうきやうの哥也咲花
ま若狭近江ふまき羽山何りとへる歌ハ名石
所をよめるなり　新古今集郡ふよれハ近江也

一 徂彼守作志ゟよれハ丹波兒老ふ在し
一ひきれしこそまつきこゆる
細海藻なるへし
なほ川辺よひ出のおしきたるゟしてひきれなく
まおあるへしとそ
〇万葉海松のそてあをきたらなと　檣櫓紀
まろるのひきれしのことくちぎりしあるをゆひ
あつめてこそ　志深恵那集よ沸いふきこゝも
あるゝそこともの也こゝよひきれしてたてま
つりしよ
海浜で被せんと思ふも消てまさるこゝあこと院ハ

一志なかあるわしハ　河差是　白氏文集
〇今案文集ハ見えねと見えのるお相つ
なし長袖 飄䬙と文選小ここら秋興賦
よ影の字を志なふとよそ 垂文選 璀璨日上
莫て 日本紀 ぶ川まても何垂つふつれと垂のるよ
を除てハ今の志のふよハ叶ふへからす
萬葉第十
いさあこよ今も見下り秋えきこの志なひる何ん妹か信にを
同第二十
忘かふ君かするをわすれすハよ頂つや忘られん
一まへよハこゝかしさふひてや侍ん

細 毎年ハ来りて 年ととく
○今案 こりしハ古今に
梅の花ふりおける雪まかひあハれ侭てりておもり
けそりしはほしかう今し春の字をりしくと
いふ器にて つゞきかなる字之

一 ののしと強める花見えて思はぬ山にぬこおちみ
○今案 志ある人ハ道守者 日本紀 指南 菅家万葉
おもはぬ山ハ後撰に少弐説につゞける
時しもあれ花の盛につらけれハ思はぬ山に入やしなまし 菅原輔昭朝臣
六帖第二

紀第八之君におくれてひねもすに思はぬ山を思ひつるかな
秋玄女御集 元真集 重之集 実方家集
にも思はぬ山とよめり

右源註拾遺七巻一覧湖月抄之次第
亦注愚意以備他日校考者也後加大意一巻共八巻全

元禄九年七月十九日

同十年正月廿一日校畢　密乗桑門契沖